

3年『「新しい博物学」の時代』

——本文とオーセンティックな（信頼できる・典拠のある）資料とを比較して読む——

○単元・教材の目標とポイント

【単元・教材の目標】

- ・身近にある石碑の言葉と現代の言葉との意味や使い方を比較して、共通点や相違点を見つけている。〔知識及び技能〕(1)イ
- ・教科書本文や複数のオーセンティックな資料の情報を比較して、自分の考えをまとめている。〔思考力、判断力、表現力等〕C読むこと(1)エ

【単元・教材のポイント】

本単元は、第1次では、本文と資料との情報を比較し、内容や表現の評価の仕方を捉える活動を行い、第2次では、第1次で習得したことをもとにして、資料の情報を比較して自分の意見をまとめる、という2段階での構成とした。

本単元で取り上げる資料を「オーセンティックな資料」として、次のように捉えた。

・教科書用に加工されていないもの ・原文であるもの ・生徒にとって身近であるもの

生徒自身の身近にあり、学ぶ意欲の起爆剤となりうる資料を意図的に出会わせることにより、資料の言葉と自分の言葉とを比較しながら一般化したり、共通点・相違点に着目したりして、自分の考えを構築する一助となるようにした。

筆者の論の中で、先人と現代人とのつながりに読みの重点を置いた。現代と古代の叡智を融合させた事例として、藤原定家の日記『明月記』の記述による、かに星雲超新星爆発の年代特定があげられている。この事例を深く読むための資料として、『明月記』の写真や原文・訓読文を提示した。さらに、本文と比較するポイントを示した「本文とオーセンティックな資料とを比較するための資料」（資料1）を提示した。教科書本文とそれらの資料とを対応させながら当時の言葉に向かわせることにより、本文と資料の比較の仕方を捉えさせると同時に、先人の知恵が現代に生きているという筆者の考えを読ませたいと考えた。

先人と現代人とのつながりに重点を置いた読みをもとにした言語活動としては、資料から先人の知恵に対する意見文を書くこととした（〔思考力、判断力、表現力等〕C読むこと(2)ア）。

〈学び方のポイント〉

さらに、オーセンティックな資料として4種類の石碑を準備した。石碑は先人の思いを後世に残す目的で建立され、碑文には先人の知恵が凝縮されていると捉えた。石碑は、生徒が小学生時代に通学の際、毎日目にしていた場所にあたり、行事で散策した際に目にしていたりするため、生徒に身近なものとして地域に根ざした資料である。その中から班ごとに1種類を選び、「資料からわかること」「先人の知恵に対し、現代人として共感したこと」など、石碑に書かれている内容を捉えた。次に、一人一人が他者と違う石碑の情報をもつように班を再編成した。同じ情報をもたない者どうして班を編成することにより、生徒は自分のもつ情報と自分にはない情報とをリンクさせるために、主体的に聴き合いながら情報を得られると考えた。

調べた石碑について他者と情報を交流する活動として、本実践では、思考ツール(4分割シート)を使用した。4分割したうちの1マスに、自分の資料から得た情報をまとめた。他の3マスには、他者から聴き合うことによって得た情報をまとめた。それぞれの情報を1枚のシートに並べることにより、可視化した情報から共通点や相違点を導き出し、自分の考えを深めていった(資料2)。4分割シートの情報を事例や根拠として、先人独自の考え方や現代にも通じる考え方など、先人の知恵に対する自分の考えを意見文にまとめた。

○評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・石碑の言葉と現代の言葉との意味や使い方を比較して、共通点や相違点を見つけている。	・本文と資料との情報を比較して評価し、自分の考えに生かしている。 C読むこと	・資料からの情報をもとに、自分の考えをすすんでまとめたり伝えたりしている。

○学習指導計画（全7時）

時数	学習活動	評価基準
1	○本文を読んで1次感想をまとめる。	◇興味深く感じたことや疑問に感じたことについて感想を書こうとしている。
2	○筆者の考える「現代の問題」と「新しい博物学」をとらえる。	◇「現代の問題」と「新しい博物学」について文章中の言葉を使って説明している。
3	○『明月記』の資料から現代と古代の叡智の融合を捉える。	◇教科書本文と明月記の資料を比較し、事例をもとに筆者の主張を捉えている。
4	○地域の石碑を読み、先人の知恵を捉える。	◇石碑の言葉を引用するなど、根拠を示しながら先人の知恵をまとめている。
5	○石碑の情報をもつ他者と交流する。	◇他者の石碑の情報と自分の情報とを比較して、共通点や相違点から先人の知恵に対する自分の考えを記述している。
6	○先人の知恵に関する意見文を書く。	◇石碑の情報を交流したことをもとに、先人の知恵に関する意見を書いている。
7	○一次感想(教科書本文読後の感想)と二次感想(単元終了後の感想)を比較した振り返りを書く。	◇一次感想と二次感想を比較して、考えが変容したことを中心に振り返りをまとめている。

○本時の展開（3／7時）

【ねらい】

- ・教科書本文と明月記の資料を比較して読むことをとおして、先人と現代人とのつながりに対する自分の考えをまとめる。

【オーセンティックな資料】

- ・明月記書字：『冷泉家時雨亭叢書 第五十六巻 明月記1』冷泉布美子（精興堂 1993）
- ・明月記訓読文・書き下し文：『訓読 明月記 第五巻』今川文雄（河出書房 1977）

（資料1）

- ・石碑の概要：弘道館から①「弘道館記碑拓本」弘道館建立の意図が述べられ、弘道館で学ぶ、忠孝一致・文武一致・学問事業一致・神儒一致が説かれている。②「要石歌碑」齊昭の和歌「行く末も 踏みなたかへそ あきつ島 大和の道そ 要なりける」が記され、道徳が教育の要であることが述べられている。③「種梅記碑」花を觀賞したり春をいち早く伝えたり、戦いのときの副食などになるなどの理由から多くの梅を植えたことが述べられている。偕楽園から④「偕楽園記碑」は、偕楽園建立の意図が述べられ、「学び勤めかつ遊ぶ」という勉学と休養のバランスを常に心がけることが説かれている。

【本文と資料をつなぐ資料】

- ・自作資料（資料2）

【本時の展開例】

学習活動	指導の留意点	◇評価基準
<p>1 藤原定家の書字写真（P47）を見た感想を述べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メモ書きのようだ ・急いで書いている ・書きまちがいがある <p>2 本時の課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>教科書本文と『明月記』の資料を比較して読み、筆者の主張を捉えよう。</p> </div> <p>3 教科書本文と『明月記』の資料（資料1）を比較させて読む。</p> <p>(1) グループで資料を読み、わかったことをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教科書本文と資料とが一致するところ。 ・1054（天喜2）年は、かに星雲の超新星爆発が起きたと推定される時期と一致。 ・1006（寛弘3）年のおおかみ座の超新星爆発と1181（養和元）年のカシオペヤ座の超新星爆発。 <p>(2) 『明月記』の事例をもとに筆者の主張を捉える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○定家の記録と最新の技術とを合わせることによって、超新星爆発が起こった年が1054年というように決定できた。 <p>4 本時を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○昔と今とをつなぐことの重要性を感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○黒く塗りつぶしている点に着目させ、書字がメモのような表記であることを確認させる。 ○本時は教科書本文の『明月記』の事例と資料とを比較して読み、筆者の主張を捉えていくことを確認する。 ○資料を配付し、それぞれの資料について説明を加える。 ○本文「『明月記』の十一月八日の項には、過去の客星の出現例が八例載っています。」（P46）について、「本文と資料をつなぐ資料」の番号①～⑧をもとに見つけるように指示する。 ○特に番号⑤⑥⑧の教科書本文との対応を確認させる。 ○新星爆発の年代特定に『明月記』が、どう関係したのかを中心に教科書本文を読むように指示する。 ○本時の学習をとおして考えたことをまとめるように指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇書字をもとに、定家の書き方の特徴を説明している。 ◇課題と達成すべき点に線を引いている。 ◇「本文と資料をつなぐ資料」から、本文と資料とを比較するポイントをおさえている。 ◇教科書本文と『明月記』の資料を対応させながら、筆者の主張に線を引いている。 ◇本時の学習をもとに自分の考えをまとめている。

○授業の成果と課題

【複数資料の提示】

複数資料として、『明月記』の書字写真・原文・訓読文、そして教科書本文の事例とそれぞれの資料とをつなぐ自作資料を提示した。それらをもとにして、それぞれの資料と教科書本文を比較させながら読み取らせていった。定家の書字は、メモのような走り書きで書かれている。生徒は、定家が誤った字を黒く塗りつぶすなどの特徴を見つけ、メモを取る際の自分たちと変わらない先人の書字に、共感しながら興味深く見ていた。教科書本文「過去の客星の出現例が八例載っています。」という記述から、配付した資料の客星出現例と教科書本文とを比較させ、

その八例を確認した。以下に示したのは、生徒が書いた振り返りである。『明月記』が当時の日常の記録として優れたものと理解し、教科書本文では知り得なかったことを知り、昔と今をつなぐことの重要性をとらえていることがわかる。教材用に加工されていないオーセンティックな資料と比較させて読むことにより、教科書本文への理解を深めることにつながったと考える。



『明月記』の客星の記述を読み、私は観察記録のような印象を受けた。目で見ただけで明確に書かれている。よって、『明月記』に書かれた内容は信頼性の高いデータであると考えた。「新しい博物学」と関連させて考えると、昔と今をつないで学びを深めることに重要性を感じた。昔に今のような精密な機械はなかったが、このような記録も重要な情報源となることを多くの人知ることができたと感じた。

読解を深めることを意図して提示した『明月記』のオーセンティックな資料は、そのまま提示してしまうと、本文にあげられた事例と資料のどの部分を比較すればよいかということばかりを探すことに注意が注がれ、逆に生徒の思考を混乱させてしまう恐れがある。そのため、自作資料として「教科書本文と資料とをつなぐ資料」を提示し、本文の事例に対応した部分がオーセンティックな資料のどこに対応するか、どこを見れば比較できるのかなど、ポイントを示したことで、資料を教科書本文への理解を深める教材として生かすことができた。

【1次感想と2次感想との比較から】

下に示したのは生徒の1次感想と2次感想とを比較した振り返りの抜粋である。生徒の記述には、石碑の言葉と実生活とを対比したり、「新しい博物学」について自分なりの言葉でまとめたりして、自分の問題として深く学んでいる。先人の知恵と現代の関わりを聴き合いにより内省する中で、学習後に変容した自分を見つめていることがわかる。身近であっても自分との関係を見いだすことのなかった石碑に刻まれた言葉を学び、自分とのつながりを見つけたことにより、「新しい博物学」の理解と自分の問題意識を深めたと考える。

- ・『「新しい博物学」の時代』を学習して「ものごととものごとを結びつけて考える」ことはとても重要なことだと思った。知識や意見を「単体」でもつだけではなく、その一つ一つを結びつけて考えてみることで、新しいすばらしい見方や考え方が生まれてくるのだと思った。これからの生活の中にも「関連づけて考える」ことを意識したい。
- ・最初は「博物学」という言葉のイメージしかもてなくて、学問というだけで終わらせていたけれど、その学問とは、数えきれないほどの先人たちの知恵と努力の詰まったものであり、「新しい」の本質を見抜くことができたと思います。それは、旧態依然のままではなく、継承された知恵に、さらに上乘せして考えることができる学問が「新しい博物学」なのだということがわかりました。

今後も生徒に提示することが適しているかを吟味しながらオーセンティックな資料を選び、生徒の学びを深めることができるような実践を積み重ねていきたい。

資料 1

本文とオーセンティックな資料とを比較するための資料

——『明月記』客星の記述について——

組 名前

治承4年 1080年 9月15日甲子 定家19歳時

夜に入り、明月蒼然（ソウゼン）。故郷寂として車馬の声を聞かず。歩み縦容として六条院の辺りに遊ぶ。夜漸（ヨウヤ）く半ばならんと欲す。天中光る物あり。其（ソ）の勢、鞠（マリ）の程か。其の色燃ゆるが如（ゴト）し。忽然として躍るが如く、坤（ヒツジサル）より良（ウシトラ）に赴くに似たり。須臾（シュユ）にして破裂し、炉を打ち破るが如し。火、空中に散じ了（オワ）んぬ。若（モ）しくは是（コ）れ大流星か。驚奇す。

『訓読 明月記 第一巻』今川文雄（河出書房新社 1977年）

「一二三〇（寛喜二）年十月二十八日、客星（訪れ、去っていく客のように、一時的に輝く星や彗星のこと）の出現を目撃した定家は、その様子を毎日のように詳しく日記に書きつけるとともに、過去の文献を読んで前例がないかどうかを調べました。」……教科書P46

寛喜2年 1230年 10月28日当日には客星の記述なし（11月1日に記述あり）。

寛喜2年 1230年 11月4日

夜天晴れ、奇星を見る。此（コ）の星朧々（ロウロウ）として光薄し。其の勢小にあらず。

『訓読 明月記 第五巻』今川文雄（河出書房新社 1978年）

「『明月記』の十一月八日の項には、過去の客星の出現例が八例載っています。」……教科書P46

- | | | |
|-----------------------|-------|-----------------------------------------------------------|
| ①皇極天皇元年 | 642年 | 客星月に入る。 |
| ②陽成院貞観一九年 | 877年 | 客星辟（ヘキ）に在（ア）り。西の方に見ゆ。 |
| ③宇多天皇寛平三年 | 891年 | 客星東に在り、星の東方に成る。相去る一寸の所なり。 |
| ④醍醐天皇延長八年 | 930年 | 客星羽林の中に入る。 |
| ⑤一条院寛弘三年四月二日 | 1006年 | 官中に騎す（騎官おおかみ座）大客星あり。熒惑（ケイコク＝火星）の如し。光明動耀（ドウヨウ）、連夜正しく南方に見ゆ。 |
| ⑥後冷泉院天喜二年四月中旬以後 | 1054年 | 丑の時、客星觜（オリオン座）を出で、度に参じ東方に見ゆ。孛天関星（おうし座）、大いなること歳星（木星）の如し。 |
| ⑦二条院永万二年四月二十二日 | 1166年 | 亥（イ）の時（午後10時）、客星慧（ケイ）大微の宮中に見ゆ。 |
| ⑧高倉院治承五年（安徳天皇崩御の後の事か） | 1181年 | 定家20歳時 戌（イヌ）の時（午後8時）、客星北方に見ゆ。王良星（カシオペア座）に近く、伝舎星（キリン座）を守る。 |

『訓読 明月記 第五巻』今川文雄（河出書房新社 1978年）

「この記録に表された星の位置は、かに星雲の位置とぴたりと一致しました。さらに、一〇五四（天喜二）年は、かに星雲の超新星爆発が起きたと推定される時期とも一致します。定家の記録と最新の技術とを合わせることによって、超新星爆発が起こった年が一〇五四年というように決定できたのです。……⑥

ならばと、世界中の天文学者によって、定家が記録した他の例も調べられました。その結果、一〇〇六（寛弘三）年のおおかみ座の超新星爆発……⑤

と一一八一（養和元）年のカシオペア座の超新星爆発……⑧

も、定家の記録と一致することがわかりました。」……教科書P47

借来園記碑 D	要石歌碑 C
<p>借来園記碑 D</p> <p>とんちのでも生きておのけ けいけいける 「一階一室」 「一寒一暑」 階乗園</p> <p>けいけいのために作った 弘道館で勉強し、階乗園で息を吐く。 息を吐くことが大切 ↳ 階乗園をうまく利用</p> <p>⇒ 大変なときも息が大切だとわかった</p> <p>弘道館記碑 A</p> <p>弘道館の学生が心得 ↓ 朝から晩まで精神を集中して学び、 心を伸ばして、思想に響かせる。それが、 弘道館設立の趣旨</p> <p>勉強は園からの恩恵に答えること！</p> <p>⇒ 弘道館の園長先生像</p> <p>by 現代人 弘道館 by 現代人</p> <p>資料2 生徒の四分割シート</p> <p>有昭は 木を尊敬していた。</p>	<p>要石歌碑 C</p> <p>有昭の和歌 弘道館の最も神聖な所に置かれている 気性の荒かたがわかる → この石碑</p> <p>有昭 → 有昭 儒学 → 儒学 & 日本古来(神道) 「神籠一歌」 → 有昭の歌碑、石碑の石。</p> <p>⇒ 自分の意思・思想を通す、という力がたい。 by 現代人</p> <p>種梅記碑 B</p> <p>徳川有昭 → 少年のころから梅が大好きだった。 → 水戸には梅が少なかった。 → 水戸に梅が少なかった。 → 園で梅を 有昭は江戸から、梅の種を園へ送り、植えた。 ⇒ 弘道館が「つくりだした、数百年を植えた。」</p> <p><梅の良いところ> 文才を伸ばす「梅」 酸を吐く「梅」(酸は毒(酸)の味) 園中に美しい花が咲き、鳥獣が「たたく」 「七間の痛痛を治すため、三年間おつかひよく梅を育ててお返しする。」 ⇒ 時間を取ってくれること。 「梅は七間の痛痛を治す。」 梅は七間の痛痛を治す。</p> <p>自分の好きな梅 を園地に植え、 梅を大切に育てた。</p> <p>by 現代人</p>